

老年と死 — Saul Bellowの短編 “Leaving the Yellow House” における “the yellow house” の意味

(生 / 老 / 死)

市 川 真 澄

“Leaving the Yellow House”は1957年 *Esquire* に発表され、1968年に *Mosby's Memoirs and Other Stories* の中に収録された短編である。主人公は72歳の老女 Hattie である。自分の不注意による事故で怪我をし、余命いくばくもないと感じた Hattie は唯一の財産である “the yellow house” を誰に譲ったらよいかと思いつたが誰もが己の利益のみを追求し、自分のことは少しも考えてくれないことを初めて知り、愕然とする。そして Hattie は落胆のあまり自分に “the yellow house” を譲渡する遺書をしたためる。この短編は Bellow 独特の含蓄のある、衝撃的な文章で終わる。

Then she thought that there was a beginning, and a middle. She shrank from the last term. She began once more—a beginning. After that, there was the early middle, then middle middle, late middle middle, quite late middle. In fact the middle is all I know. The rest is just a rumour.

Only tonight I can't give the house away. I'm drunk and so I need it. And tomorrow, she promised herself, I'll think again. I'll work it out, for sure. (p.43)

Bellow は “Leaving the Yellow House” を発表した翌年の1958年に *Seize the Day* を発表している。この中編小説の最後の場面も非常に印象的である。主人公 Tommy Wilhelm は誰にも見捨てられ、呆然自失して通りを歩いていくうちに葬列にまぎれ込み、教会に入り、棺の中に横たわる見知らぬ死者を見て慟哭する。この場面が続くあの有名な最後の一節によって、読者は主人公が般若心経的な悟りの境地に近い境地に到達したと感じる。“Leaving the Yellow House” の最後の一節にも仏教的なものが感じられる。前者の *Seize the Day* の最後の一節は死者との同一化であり、後者は死者との同一化の拒否である。一見、両者は非常に対極的な関係にあると感じられるが、後者の死者との同一化の拒否は、限りなく死に近づきながら死との境界を見極めようとする生に対する執着の強さを示していて、死者との同一化と表裏の関係にある。ガンで亡くなった人の手記が最近流行しているが、聖マリアンナ医科大学教授でガンで亡くなった岩井寛が口述し、松岡正剛が構成して出版した『生と死の境界線』(講談社, 1988)に於て、岩井寛の、生への執

着を通しての生と死の境界の追求が見事に描かれている。岩井寛が到達した境地は、生が死となり、死が生となるという生死一如の境地と軌を一にするものである。老人の死の多くは、深沢七郎の『檀山節考』のおりん婆さんの死のように「死は決して閉ざされた扉ではなく、開かれた門であった。」¹⁾ “Leaving the Yellow House”の主人公 Hattie は、人の生には始めがあり、中間があり、その中間がどこまでも続き、終息することがないという境地に到達するが、この境地こそ生死一如の境地である。

Hattie は東部の Philadelphia から Segoe Desert Lake へやって来た 72 歳の老女である。この土地で今は亡き India と一緒に “the yellow house” に住むことになり、India の死後この家を遺贈される。何故ここへやって来たかは、はっきりと書かれていないが、都会での酒びたりの生活で身をすっかり持ち崩してしまったからであろう。India もニューヨークでの自堕落な生活に不安を抱き、この Segoe Desert Lake にやって来た。しかし、ここでも都会で身につけてしまった飲酒癖から逃れることはできず、2人は朝から酒を飲み続け、酔っぱらい、スリッパ一枚になって家の周囲を徘徊することもしばしばであったようである。Segoe Desert Lake は Sanfrancisco まで 500 数マイル、Salt Lake City まで 200 マイルの地点にあり、そこには木と名のつくものと言えば、cottonwoods と boxelders ぐらいしかなく、sagebrush と juniper などの雑草が海岸まで広がっている。Segoe Desert Lake は文字通りの不毛の地である。

この荒涼とした土地には若い人は殆ど寄りつかず、高齢者のみが住みついている。ここに Hattie の “the yellow house” が建っている。普通の水準から言えば、決して立派な家とは言えないが、家らしい家は白人の Pace と Rolfe の家しかなく、白人以外の人に住む家は掘立て小屋か古くなった車を改造したものであることを考えれば、“the yellow house” がこのような荒涼とした砂漠では一際人の目を惹く建物にちがいない。Bellow は Hattie の家を “the yellow house” と書いていることが多く、“the yellow house” に何か特別な意味を賦与していると思われる。

“the yellow house” が Hattie によって重要なものとして認識されるようになったのは、Hattie が不注意によって腕を折る大怪我をしてからである。Hattie はもうそんなに長く生きられないと感じる。それと共にそれを遺贈してくれた India への思いがつのって来る。大怪我をして、家にかつき込まれた Hattie の上に Helen Rolfe は India が死ぬ時かけていた毛布を置く。Hattie は一瞬とまどうが、それをはねのけることはせず足を温めるためにそのままかけておく。その後 India の亡霊が現れ、Hattie に語りかける。

Above the horizon, in a baggy vastness which Hattie by herself occasionally visited, the features of India, her *shade*, sometimes rose. India was indignant and scolding. Not mean. Not really mean. Few people had ever been really mean to Hattie. But India was annoyed with her. “The garden is going to hell, Hattie,” she said. “Those lilac bushes are all shrivelled.”

“But what can I do? The hose is rotten. It broke. It won’t reach.”

“Then dig a trench,” said the phantom of India. “Have old Sam dig a trench. But save the bushes.” (pp. 19–20)

亡霊は生と死の狭間を動き回る。亡霊は生の世界でも死の世界でも安住の地を見出すことができず、この世に残された愛する遺族の前に出現し、忠告したり、慰めたり、諭したりする。Hattie は India の *Shade* を見ることによって、誰よりも India が自分を愛してくれていたことを悟る。Rolfe や Pace 等自分に関わりの深い人々を思い浮べる時、India 程純粹に自分のことを思ってくれていた人はいなかったことを知る。

Hattie の意識下での死への意志と共に、皮肉にも荒涼たる自然にも生命の息吹が見られる。

Heavy rains had fallen while Hattie was away. The sego lilies, which bloomed only after a wet winter, came up from the loose dust, especially around the marl pit; but even on the burnt granite they seemed to grow. Desert peach was beginning to appear, and in Hattie's yard the rosebushes were filling out. The roses were yellow and abundant, and the odour they gave off was like that of damp tea leaves. (p. 22)

「死を間近に意識した人の目に映る風景は、なぜこうも光に輝いているのか。」²⁾ オーストリアの精神科医フランクは、アウシュビッツの強制収容所で囚人たちが窓際にかけて西へ沈む赤い太陽の美しい姿に感嘆の声をあげるのを目撃して、感動する。一年先のことであろうと2年先のことであろうと、死を不可避なものとして意識する人の感性は高揚してくる。不毛の Sego Desert Lake が Bellow の筆によって豊穡の地と化すのも、Bellow が Hattie の死を予定しているからであろう。

Bellow は、Hattie が生を人の世に受け、そしてやがて病を得、死の解体作業を経て、無に帰してしまう様子を次のように描写している。

So she stood up and, rising, she had the sensation that she had gradually become a container for herself. You get old, your heart, your liver, your lungs seem to expand in size, and the walls of the body give way outward, swelling, she thought, and you take the shape of an old jug, wider and wider towards the top. You swell up with tears and fat. She no longer even smelled to herself like a woman. Her face with its much-slept-upon skin was only faintly like her own like a cloud that has changed. It was a face. It became a ball of yarn. It had drifted open. It had scattered. (p. 34)

E・キューブラー・ロスは、人は死の直前には今まで生涯において自分を本当に愛してくれた人のことを想起すると言っている。死を目前にした Hattie は、Indiaこそ自分を本当に愛してくれた人であったと実感し、彼女から遺贈された“the yellow house”が Hattie にとって非常に大切なものとなる。Hattie は“the yellow house”を譲るにふさわしい人を思い浮べるが、誰もが己の利益だけしか眼中になく、“the yellow house”を手に入れるためには自分を追い出そうとさえする事を知り、落胆する。瀕死の重症を負った Hattie は今まで信頼して来た人々からも裏切られ、“the yellow house”が自分の生の

唯一の支えであると実感する。

Bellow は“ the yellow house ”にどのような意味を与えようとしているのであろうか。1986 年 5 月にガンで死亡した岩井寛は、死ぬ半年前に上梓した『色と形の深層心理』(NHK ブックス, 1985)の中で黄色は浄土の色であり、涅槃の色であると述べている。

『イメージ・シンボル事典』(大修館書店, 1984)で黄色の項を見ると、黄色の意味は多岐に渡っていて、どんなことでも言えるように思われるが、死を前にした岩井寛の黄色についてのこの陳述は真実味がこもっていて、説得力がある。すべての人々から見捨てられた Hattie にとって、頼りになるものは“ the yellow house ”のみである。死を間近にした Hattie はできるだけ長く“ the yellow house ”を享受したいと思う。彼女は“ the yellow house ”を自分に譲渡するという奇妙な遺書を書くのであるが、それは“ the yellow house ”が信仰の対象となっているからであろう。つまり、“ the yellow house ”は彼女の涅槃となり、浄土となったのである。Hattie が死を恐れることなく、限りなく死に近づきつつ生を全うしようと努める姿は、モンブラン登頂に成功したガン患者の悲愴な姿と同じ様に感動的なドラマを生んでいる。そこには、生が死となり、死が生となるという仏教的な生死一如の公式が鮮やかに成り立っている。

本稿における“Leaving the Yellow House”からの引用はすべて Saul Bellow, *Mosby's Memoris and Other Stories*(Penguin Books, 1971)により、本文中でカッコ内にその頁数を示す。

- 1) 多田富雄・今村仁司一編, 『老いの様式』, 誠信書房, 1987, 126 頁。
- 2) 柳田邦男, 『「死の医学」への序章』, 新潮社, 1986, 11 頁。